

# さくらだより【40号】



2014年7月9日発行

日本でも生殖医療は「希望の医療」であるばかりではなく「欲望の医療」の一面が垣間みられるほど技術水準が向上し、人間ができないことはないのではと錯覚を覚えるくらいです。一方、生殖医療によって複雑な環境を背負って生まれてくる子供たちもいます。最近では、精子提供によって生まれた男性が自分の出自を知る権利を求めているという事例がありました。生殖医療で生まれた子供の「出自を知る権利」はイギリスと北欧のいくつかの国で例外的に認められていますが、多くの国では自分のルーツ探しは困難をきわめています。出自を知る権利を認めるとドナーが減って不妊夫婦の不利益になるとも心配され、医療界では抵抗が強いのが現実です。実際に慶應大学での精子提供者は激減していると聞いています。生殖医療に寛大で宗教的な制約の少ないアメリカでは、他人の余った受精卵を譲り受け養子として育てている夫婦もいるようです。代理母、精子・卵子バンク、卵子の凍結保存サービス等、生殖医療の進歩は家庭や親子のあるべき姿をいやおうなく変えていくことでしょう。複雑化した親子環境の中で生きていく子供たちにどのように説明し納得させるか、あまりにも「子供が欲しい」という夢を、患者さんや医師が求めるあまり誰かを犠牲にしていないのか、100%の幸せを追求する私達生殖医療にたずさわるものには少し重い課題を克服しなければならぬと感じている今日頃々です。

遅くなりましたが、今年の1月から4月までのARTの成績です。40代の皆さん頑張っています。卵子の老化は解決法がないとはいいますが、自分の卵を信じて、科学技術の限界を越える信念を持って挑戦していきましょう。

## 《2014年1月～4月のARTの成績です》

採卵件数・・・105例【～29歳6例、30～34歳17例、35～39歳39例、40歳～43例】

受精方法別 { 体外受精・・・62例  
顕微授精・・・34例

融解件数・・・125例【～29歳10例、30～34歳28例、35～39歳49例、40歳～38例】

移植件数・・・130例【～29歳12例、30～34歳28例、35～39歳50例、40歳～40例】

妊娠数・妊娠率（移植あたりの胎嚢陽性率）・・・45例(34.60%)

【～29歳6例(50%)、30～34歳11例(39%)、  
35～39歳19例(38%)、40歳～9例(22.5%)】

